

「メッシュいいねえ」

— 言語行動を通じて見る“当世書生氣質” —

国際学部

野村 美穂子

1. はじめに

私は湘南キャンパスにおいてふだんは専ら留学生のための日本語教育に携わっている。そのため、これまで一般の日本人学生に身近に接することはほとんどなかった。ところが、今年度前期、ふとしたことで半年間のみ一般学生向けの「言語学」の授業を担当することになった。登録数300名を超える大教室の授業であったが、出欠確認のかわりに毎回小さな紙を渡して、授業後に回収することにした。書く内容については、氏名と学籍番号のほか、質問や感想など授業内容にかかわることなら何でも可とした（ただし、初回の授業の際のみ、なるべく「なぜこの授業を履修したか」「言語学とはどのようなものだと思うか」「この授業で何を学びたいか」などについて書くよう指示した）。読む方の作業量は相当なものであったが、これは私にとって大変興味深い試みとなった。自分自身彼らと同じ年頃の大学生だった頃からまだ20年経っておらず、現在でも少なくとも所属する国際学部の専任教員の中ではまだ若い方から数えて3番目くらいのはずである。しかし、この機会に10代終わりから20代はじめという現代の若い日本人の日常的な言語行動を目の当たりにし、実にいろいろと驚いたり考えさせられたりした。この場を借りて、上記提出用紙に書かれた内容を中心に学生の言語行動を紹介するが、それにより“当世書生氣質”の一面をかいま見ることができるのではないだろうか。

2. 言文一致体（！？）の普及

用紙に記入された言語表現の中で際立って目についたことのひとつが、若者の書きことばにいかにか話しことばが入り込んでいるかということである。私の意識では、話しことばの場合と書きことばの場合とではことば遣いの丁寧さが異なってくるのがふつうであり、書くという手段をとる場合の方が比較的丁寧度が高い（さらに言えば、話す場合でも、例えば向かい合って話すときと留守番電話にメッセージを入れるときとは丁寧さが異なる）。したがって、書きことばでは俗語や省略語などは比較的使いにくいし、たとえかなり親しい相手に対してであっても、話す場合に比べれば“なれなれしさ”の少ない表現をする。しかし、学生たちはそういった私の固定観念をきれいさっぱり吹き飛ばしてくれた。まずいくつか項目立てて見てみる。

2-1. 「いまいち」

(1) 私たちにとって必要不可欠な「言語」。そのことについて学べる授業なので、とりまし

た。内容はいまいち把握していませんが、授業内で何か得るものがあれば、と期待しています。

(2) 言語についてはまだいまいちよくわからないのでがんばりたいと思う。

(3) 舌の使い方はいまいち難しい。

見てわかるとおり、特に(1)などは、かなりまじめな、しかも比較的きちんとした文である。しかし、そのきわめてまじめな表現の中に、話しことばの中でもまだ俗語としか言えない「いまいち」が、何とも不釣り合いに混入しているのである。「いまいち」ということばは、そもそも「今一」という表記に対し「いまひとつ」と読むことを知らずに間違えて読んだものが面白がられて広まったものと思われる。広まってはいるが、やはりもともとが誤りであり、書きことばとしては無論のこと、話しことばとしてもまだ社会的に認知されているとは思えない。しかし、このようなまじめな回答の中で使われているのを見ると、もしかすると、今の学生たちの一部の意識においては、もはや「いまいち」こそが正しいことばになっているのかもしれない。

2-2. 「あと」

(4) 統合関係の「顕在的」というイミがわかりません。言語にもいっぱい特性があることがわかった。あと恣意性のイミがよくわかりません。

(5) 日頃、私達が使っている日本語の本質や他の言語との本質の相違点などが知りたかったから授講しました。そもそも言語とは何なのかということに興味を持っていたので。要望としては詳しくやってほしいと思います。あとノートにとりやすい書き方をしてほしいと思います。

この「あと」というのも私が最近気になっている表現の一つである。最初は留学生の作文によく出てくるので気がついた。ものごとを羅列していく際に「それから」「そして」あるいは「最後に」などといった意味の接続詞としてよく用いられる。確かに話しことばの中では珍しくもないが、従来書きことばでは出てこなかった表現であり、私は留学生の作文については毎回上のように説明して訂正してきた。まさか日本人の文にも頻出するものだとは思ってもいなかったが、そういう私の前提は完全に覆されてしまった。

2-3. 「なんか」

(6) なんか、先生はすごいなあと思ってしまいました。

(7) なんか、気候によって方言がにっていて、やっぱり寒さとか、原因があるんだなと思った。ここに掲げたような「なんか」は、「あー」や「えーと」と同様、話の間を埋めるいわゆる“フィルター”的なものとして、話しことばにおいては頻出するものである。このような「なんか」は書きことばのきちんとした文ではふつうあらわれないし、あえて表現しようとするれば「何となく」あるいはせめて「何だか」となるであろう。しかし、学生の文には何のためらいもなく使われている。

2-4. 「なにげに」

(8) なにげに使っている言葉も詳しく分析してみるとおもしろい。

(9) ふだんなにげに使ってる言葉も深く考えるとすごくむずかしくなってしまうのがわかった。これはむしろ語句自体が変化しはじめている例かもしれない。現段階で一般的にはもちろん「な

「にげなく」という表現が正しいとされているが、若い世代の会話では「なにげに」がよく使われている。ところで、私自身はもちろん「なにげに」を使うことはないが、では会話において「なにげなく」と言うかという、これが必ずしもそうではない。「なにげなく」は話しことばという感じがあまりしないのである。会話において「なにげなく」ということを言いたいときには、むしろ「何も考えないで」というような表現のしかたをするか、あるいは擬態語を用いて例えば「サラッと」などという表現を用いることが多いように思う。「なにげに」はこのように多少“かたい”響きをもつ「なにげなく」に由来することが明らかだと考えられるにもかかわらず若者の会話において自由に用いられているのであり、これは不思議と言えば不思議なことである。

2-5. 「～ゆう」

(10) 硬口蓋音の ŋ ← こうゆうやつは n とはどちらがうのか。

(11) 言語学というものはどうゆうものかよくわかりません。この時間は空いていたのでとってみました。

(12) アメリカ^(ママ)英国とイギリス^(ママ)英国の発音の違いなどの勉強を通して、言語の奥深さや風しゅうなどによってこれほど変わってくるのかをゆうのを学び、とても驚いた。

これらの「～ゆう」は、日本語の表記の規則において「～いう」と書くことになっているだけで、現実の発音から考えれば確かに「～ゆう」の方が近いだろう。しかし、表記の規則については小学校以来の国語教育でいやというほど勉強してきたはずである。彼らがそれが正しいと心から信じて「～ゆう」と書いているのか、あるいは例えば軽い感じの演出のために(?)「～ゆう」と書いているのか、私にも判断がつかねる。

2-6. 「～てる／～でる」

(13) 今日はとてもむずかしくてたいへんでした。ちょっとついていけないかもしれない。どの程度つかんでればいんでしょう。

ここで注目したいのは「つかんでれば」という箇所である。動詞の「～ている」形は、話しことばにおいては「い」がほとんど発音されず「～てる」「～でる」のようになるのがふつうであるが、しかし現在でも書きことばとしては「～ている」「～でいる」の形で書くのが一般的であり、何か別の意図がない限り(例えば、小説中の会話の描写や、少し軽い感じをねらったエッセイなどの中では、「～てる」「～でる」という話しことばの形のままでよく用いられる)、「～ている」「～でいる」のみが認知された形と言える。しかし当節の若者たちはそのような区別をあまり重んじないのか、例は一つしか掲げなかったがほかにも随所にこの形が散見された。この(13)では第1と第3の文がいわゆる丁寧体で終わっている中で2番目の文のみが「～かもしれない」という普通体になっていることも興味深い。はからずも“途方にくれている”感じがよく伝わってくる文である。

2-7. 「～って」

(14) 発音とかよりも語用論や協調の原則のような講義の方がやっぱ興味があって“あ、そーなんだー。”って改めて母国語について考えた。

(15) 方言ってその地域の特別な言葉だから、大切にしたい。

(16) この間新聞の勧誘がきて「お引きとり下さい」と丁寧にいったにもかかわらず「ふざけ

んなよ」と逆ギレされてしまった。今日の授業でならったように丁寧さの原則はかなっていたのだが「新聞を取る」ということに関して協調の原則にかけていたんだなあとと思った。(ちなみに3ヶ月契約させられましたが即効でクーリングオフに成功、ざまーみろって感じですよ)

(14) は「やっぱ」なども入っていて、きわめて話しことば的である。(16) もなかなか面白い。授業の内容を自分の経験に照らし合わせて考え(授業の受け方としてこれは非常に望ましいことである) その件について説明した後、わざわざ「ざまーみろ」という荒っぽいことばと「～って」という話しことば的表現を用いたことにより、そのときの感情がストレートに伝わってくる。意図したことかどうかはわからないが、書きことばの表現を話しことばが侵略した(?) ことにより、ある種の効果が出た例である。

2-8. 「～けど」

(17) 今日は、土曜日なのに来てしまっていて非常に疲れた。けどわかりやすかった。

(18) あまり理解できなかったけど興味は持てる内容だった。

予期せぬ補講までしなくてはならなかった私の側にしても「土曜日なのに来てしまっていて非常に疲れた」と言いたいのは同じなのだが、それはともかくとして、ここにあげた「けど」はもちろんふつうは書きことばには用いられない。(17) のように独立した接続詞の場合は「しかし」「だが」などを用い、それでは少しかた苦しすぎるという場合でも、せめて「けれども」とするものと考えられる。(18) のように文を独立させずに従属節としてつなぐ接続助詞の場合、「～が」「～けれども」である。ちなみに、私が子どもの頃、ある歌謡曲の歌詞に「大人びたふりをしてここまですてきたが、はりさけるときめきでめまいがしそうよ」というような一節があり、子ども心にも「この“ついできたが”の“が”は“けど”の方が話しことばっぽくてまわりの部分とピッタリくるんだけどなあ」と疑問を感じていた。上掲の例はちょうどそれと逆の場合と言える。歌の場合にはメロディーとの関係があり、作詞家は音節数を調節しなくてはならないという別の課題を抱えているので、このような少し違和感のある言語表現も出てくることになるのだろうが、学生の言語表現の乱れは、単に彼らが文を書き慣れないためなのか、それとも、前にも触れたように、例えば親密さをあらわそうとするなどといった別の意図によるものなのか、判断に悩むところである。

2-9. 擬音語・擬態語

(19) なんかメチャメチャ話が難しくて頭が混乱しそうです。VSO、SVO、SOVの表も意味がわかりませんでした。もう少し分かり易い^(VVO)講義をお願いします。

(20) SVO型とSOV型とVSO型がある。日本語はSOV型!? SVO型は英語など!? なにをもっとも重要とするかによって型が変わることがわかった。ウー!!!

(21) 先生が発音を区別して色々な音を言っていました、ほとんど全てきき分けできないので、私の耳はバリバリに日本語仕様だという事が分かりました。

擬音語・擬態語を頻繁に用いるのも本来は話しことばの特徴である。(20) の「ウー!!!」は「うなりたくなるくらいの気持ち」をストレートに表現した擬音語そのものであるが、(19) の「メチャメチャ」や(21) の「バリバリに」は、書きことば的に言い換えれば、それぞれ例えば「とても」「非常に」や「全く」「完全に」などとなるものと思われる。仮に私自身が回答する学

生の立場であったとすれば、まず「バリバリに」は用いないし、「めちゃめちゃ」については、よほど動転していれば(?)用いるかもしれないが、その場合もおそらく平仮名表記である。片仮名表記することによって、より“話しことば性”の強さが増すように思われる。

2-10. 強調のための音の調整がそのままあらわされたもの

(22) イギリスに夏、語学研修に行く予定なのですが、とっても不安です。言語が違うので、トギドキです。

(23) もっと簡単に説明してほしい。はじめから例を出してほしい。ねむくなってしまうので。発音のしかたの調整(長音や撥音を必要以上に用いることなど)によってある語のもつ意味合いを強調するというのは、比較的一般的にどのような言語にでも共通する言語表現の特徴であると言える。ただし、それは主に話しことばの場合であって、ふつう書きことばにおいてはそういった調整の痕跡は残さずにもともの形(上例の場合「とても」「はじめから」)で表現し、強調する気持ちは例えば副詞など他の手段によって別途表現する場合が多い。しかし、学生たちの文を見る限り、そういった感覚は既に過去のものになりつつあるようである。

2-11. その他

(24) 日本語のような語順をもつ言語が多いというのに驚いた。地域ごとにまとまって、同じ形態をもつかと思えば、そうでもなく、世界規模なのだなあと思った。屈折型で、puellamとpuellaで主格や対象がかわるのがわかったが、二人称だったりすると、動詞でも判断できるのだろうか。そうすると、すごく省略できそう。

(25) 文法についての日本語の語順は意外にメジャーだという事がわかった。

(26) もともとはなかった言葉とか、ふとした瞬間に誰かが発しただけで、社会で使われたりして、その言葉が、今では、辞書とかにもでてしまうような、イキオイで、なんか、すごいと思う。

(24)の文は本来は「省略できそうだ」というようにきちんと終わるべきものであるが、ここでは話しことばそのままの形である。「世界規模なのだなあ」や「判断できるんだろうか」というような表現なども、きわめて話しことば的である。(25)では「珍しくない」「多数派だ」という意味で「メジャー」という俗語が出てきている。こういった俗語・流行語を何のためらいもなく文中で使うのも若者の言語行動の特徴であろう。(26)に至っては、何が言いたいのかわかったようなわからないような感じで、自分の心の中で思っているその過程がそのままあらわされた文となっている。もちろん会話の中ではよくあることであり、声や表情、身振りがそのあいまいさを補う手段となっているわけだが、書くというコミュニケーション行為はもともとそういった補助手段を用いることのできないものであり、そのためできるだけ論理的で明確な表現が必要となる。書き手の学生が日常的にこのような文を書いているとすると、いささか心配になってくる。

3. 表意字句(!?)の隆盛: 伸ばしたり縮めたり、止めたり払ったり

ここまでに掲げた例により、若者たちがより話しことばに近い書きことば表現を愛用していることがわかるが、しかし、実際にはいくら話しことばに近づけても書きことばは書きことばである。声の感じや表情、身振りはないわけであるし、伝えられる気持ちは限られる。そこで彼らは

今度は逆に書きことばならでの表現様式を創り出す。

(27) ①なぜ履修したの？

授業概要を見て「いいなあ→、この授業♡」と思ったからです。

②イメ→ジ、何を学びたいの？

「世界中の言語を学びたいなあ」と思います。

(28) アクセントがつく、つかないでどうイミがちがってくるのですか。(ききのがしてしまいました・・・△)

(29) 先生、いっぱい書きますね△ 毎回

(30) 私は方言マニアです。千葉県民なのに、少〜し関西なまり。関西の友達ができて、彼らからうつつた。

(31) さいごノートがとれずで黒板が消されてしまった△ ノートさがさなきゃ△ 言語は奥深いとんだか思った。8つの言葉で一体何通りの文章ができるのか次回までに調べてみよう！と思った。

上にあげた例はすべて女子学生の手になるものだが、このように特に女子学生の書きことば表現は夢幻自在である。気持ちを伝えるために、絵のようなものを添えたり記号の一部の形を変えて表現したりするなど、実にいろいろな手段を用いる。好意的な気持ちをあらわすハートマークや「大変だ」「困った」などを意味する涙マークがあちこちに出没し、ある語を強調するときにも単に長音を用いるだけではなくそれを波線であらわしたりする。表現意図の解釈に悩むのが、長音を「ー」ではなく「→」で記すものであるが、これは若い女性向け雑誌の投稿欄などでもよく見受けられる。何か特別の意味があるのか、あるいは単なる遊びなのか、どうもよくわからない。いずれにしても、若者たちのこのような自在な表記を見ていると、私としては、彼らの中にもやはり表意文字である漢字文化の根強い影響があるのではないかと何やら感じてしまう。表音文字のみの言語文化圏においても表記上これに類似した流行などはあり得るのだろうか。

4. つぶやきから叫びまで

さて、以上主に言語表現そのものを問題にして見てきたが、そういったこととは関係なく、とにかくこの提出用紙にはいろいろと興味深いメッセージがあった。当節の学生は、自分の気持ちをひとに表現する際にあまり内容や場の適切さなどということについて考えたりはしないのだろうか。以下では言語表現を少々離れてメッセージの性質について見てみたい。

(32) 言語政策とかやりたかったよー。

悲痛な心の叫び(?)とでも言えようか。急遽代講を受け持った私にとって授業概要に書かれている「言語政策」などは専門ではないため、そのような分野については後期に譲るということを経験中に学生たちに向かって説明したら、その返答としてこういった声が返ってきたわけである。「言語政策を全く扱わない」と言ったわけではなく「私には不可能なので後期に譲る」と言っただけなのだが、何となくだだをこねる子どものような、内容も形式もカジュアルな回答が返ってきてしまった。

(33) 今日は発音を先生につづいて練習してみました。いつかテレビで見た、アナウンサーの発音の仕方であっておもしろかった。共通語が、気にして使わなければならないと出てこないのは、変化してきたと思った。梅雨早く終わってえー!!

これは最後の文がいわば“落書き”風である。書き手の学生がそのときそう思ったことは事実であろうが、それをそのままここに書いてしまうあたりがやはり当節の学生である。

(34) あしたもがんばるぞ。

(35) 補講は頑張って出席したいと思います。先生もがんばって！

この講義では代講が決定するまでに休講が数回続いたのでそのための補講をしなくてはならなかった。場合によっては2日連続の講義となることもあり、(34)(35)はその際のメッセージである。これらも、あたかも仲のよい友だちと話しているかのような文であり、相手が実際に面と向かっては直接話したこともない人間、しかも常識的に見て立場上目上の人間として遇すべき“自分の教師”であることを配慮しているというようなニュアンスはない。だがしかし、一方で、(35)のようなメッセージを読んだ私が不覚にも(?)確かに「よし、もうちょっとがんばるぞ」と励まされてしまったのも現実である。

(36) はい。私は北関東(群馬)出身なので、かなりコンプレックスがありました。ほとんど標準語に近く、表現の仕方は同じなのですが、アクセントのつく位置が違う言葉があるらしく、友達によく指適(ママ)されます。(かびん、しがつ、ちゅうがっこう)。最初のほうにアクセントがつくものがあります。でも最近はそんなに気にしてませんよ。

これもいわば“お友だち感覚”で会話風の文である。最初の「はい」はいったい何なのだろうか。(ところで、これを読む限り「しがつ」はこのアクセントで間違っていないと思われるのだが……)

(37) 方言も場所ごとにいろいろ別(ママ)れているのがわかった。自分の知らない方言をたくさん知れておもしろかった。方言バンザイ

「方言バンザイ」と言われても私としても困るのだが、とにもかくにも、方言のテープをいろいろと流したこの回の授業は楽しんでくれたようである。

ところで、このように自由記入の用紙を提出させるやり方は、一面中学生や高校生の女の子が好む“交換日記”的な色合いがあるが、交換日記が対一であるのに対し、授業は対多のシステムなので、何かメッセージがあっても一つずつ丁寧に返答するわけにもいかないという点で大きく異なる。的外れだと思われる批判などがあっても直接本人に反論はしにくい。そこで私は授業のはじめに何度かそういった質問や批判への回答をまとめて行うというやり方をとった。以下はそういったやり方に対するメッセージである。内容の当否はともかくとしても、これは言語表現や言語学といった私の専門とは関係なく、教育というもののあり方や学生がどのようなコミュニケーションを望んでいるのかということについて考えさせてくれる。

(38) はじめに先生が生徒の発言についての意見を述べていました。私は、どちらが正しいとかそういうのはいいのですが、この大学に入って始めて、先生が生徒の質問に答えてくれました。しかも人数の多い講義(ママ)です。大学に入って2年、先生との距離を感じていましたが、今日は、それが少し縮まり、立場が同じになった気になりました。何かうれしかった。

さらに言えば、学生どうして意見を交換する場もあまりないのか、

(39) 授業の最初に皆の意見を聞いたのは貴重な体験でした。

という声もあった。

5. 礼儀知らずの連中

(40) なんとなくです。俺のかってだろ

(41) 意図しているものなどなくていい。あなたは代行なのであるから無用な心配である。ここまでで紹介してきたようにいろいろと楽しいメッセージもあったのだが、上の(40)(41)は数多い提出用紙の中でただ二つ私を怒らせたものである。(40)は初回の授業で履修理由や言語学のイメージを尋ねた質問に対する回答であり、文末の怒りを示す(?)マークも含めて、きわめて礼儀に反するものである。これは冗談なのだろうか。こういった冗談がいつでも誰にでも通用すると思っているのだとしたら、いささか問題だと思われる。(41)については少々長い説明が必要になる。前の回の提出用紙に「この講義を通して先生は私たちに何を言いたいのでしょうか。意図がはっきりしません」「シラバスみたいなものを改めて作って下さい」という意見があったのに対し、私はその次の回の授業の冒頭で「教える側の意図も確かに大切だろうし、それが伝わらなればこちらにも問題があるのだが、逆の見方をすれば学ぶ側が何を受けとるかにはあくまで学ぶ側の問題であり、極端に言えばこちらが言いたいことと全く逆のことを学んでも構わない。とにかく自分から主体的に授業を受けてほしい」「急なことだったので時間的余裕もないし、これからどう進めていくかを簡単に述べることはしているので、これ以上改めて詳細なシラバスを作るのは勘弁してほしい」というようなことを述べた。すると、その回の授業後に別の学生から(41)のごときメッセージが出てきたのである。これでは私の意見に対する反論にもなっていないし、こういうことをこういう表現で書いてくる学生はもはや私にとっては異星人にしか思えない。

6. 「メッシュいいねえ」

さて、上に述べてきたように、提出された用紙だけでも若者の言語行動をいろいろと知ることができ私にとっては大変勉強になったのだが、授業を担当しているからには、たとえば大教室とはいえ、書いたものによるコミュニケーションだけでなく直接ことばを交わすこともある。何度目かの授業のとき、終了直後に教壇のところまでつかつかと近づいてくる男子学生がいた。そういう場合たいていは質問である。当然私もそう予想した。しかし彼は私のところまで来ると、開口一番「メッシュいいねえ」と言うのである。最初私は何のことだかよくわからなかった。そんな私の顔を見て彼は、今度は自分の前髪を指さしながら、もう一度同じことばを繰り返した。ようやく私も了解することができた。要するに彼は私の前髪が真紅に染めてあるのを“高く評価して”くれた(?)のである。発言内容は了解できたが、私はびっくりしてしばらくことばも出なかった。私の常識では、面と向かって話をしたこともない初対面同然の人間(しかも、あまりこういうことを再三言いたくはないが、この場合、私はいかに若輩者とはいえ発言した彼から見れば立場上目上の人間であるはずである)に対し、ほめるにせよけなすにせよ、その属性その他を“評価”する発言をするということは、まず考えられない。それも、「いいですね」ではなく「いいねえ」である。これは私の常識が間違っているのか。それとも常識が変わってきたのであろうか。私が驚いた顔をしているのを見て、彼も戸惑ったようであった。ひょっとすると、「ありがとう」の一言くらい返ってくるのを期待していたのかもしれない。とにかく私にとっては非常に不思議な体験であった。ただ、私にとってさらに意外だったのは、その後の展開である。あまりにも驚

いたので、私はこの件について事後にいろいろな人に話してみた。ところが、話した相手が教員の場合（なお、教員相手では「メッシュ」の意味が一度では通じないことが多いので、説明を要する）、多くの人はあまり驚かないのである。「そういうもんだよ」と言われるか、せいぜい「プッ」と嘖き出されておしまいであった。面白いことに、教員よりもむしろ一部の学生たちの方が、この話に驚いたり憤慨したりといった反応を見せた。「えー？ ほとんど話したこともない、顔も覚えてもらってない学生がいきなりそんなこと言ったんですかあ？ 信じられない」といった反応である。これはいったいどういうことなのだろう。他の教員にとってこの件がせいぜい笑い話にしかならなかったのは、私の方があまりにも世間一般の常識とずれていて、現実にはこういう言語行動が当たりまえだということなのだろうか（だとすると、この話に驚いたり憤慨したりという反応を見せた一部の学生たちの常識もまた当節の常識からはずれているということになる）。それとも、あまり考えたくはないが、この話の登場人物であり語り手でもある私という人間に対して他の教員が抱いている何らかのキャラクター・イメージ（私自身はそれがどういうものだからよくわからないが・・・）のせいなのだろうか。もしかすると、教員は皆、当然そういった行動は常識的にはおかしいと思っているのだが、日頃このようなできごとにあまりにも慣れてしまっていて、もはや何も感じなくなっているのかもしれない。考えてみるとそれはそれで何やらこわいことである。

7. おわりに

とりとめもなく長々と述べてきたが、いずれにしても、今回一回り半ほど年が若い人々の「日本語によるいまどきの言語行動」を身近に観察することができ、“コトバ屋”の私としてはいろいろと啓発されるところが多かった。準備期間もろくになかったし、担当したこともない科目の授業を毎回ほとんど自転車操業で行うという苦しい経験であったが、そのことだけは面白かったと思っている。拙い講義につき合ってくれた学生たちには（いろいろ文句を言いたいことはあるし、就職活動などのときにどういう言語行動をとるのかを考えるといささか心配にはなるけれども）心より感謝したい。